



# 「図書館分科会」



## 図書館分科会講評

CAUA運営委員（鶴見大学）

鈴木 誠

### 図書館は混成チームで

かれこれ四半世紀も昔の話であるが、図書館の学校に入学するという話をしたときの周囲の人々は、「図書館の職員は一日中好きな本を読んでいられる」という認識を持っていたように思える。それより数十年昔、某N先生の逸話としては、両親から「そんなやくざな仕事は、頼むから辞めてくれ」といわれたとか。

図書館の仕事に就いてみると、本（資料）に囲まれていることは確かであるが、それに関する知識を獲得することと、利用者への対応の難しさと、館員への対応（これが一番難しい）と、図書館としてのシステムを考えることなど、いろいろあり、とても好きな本を読んではいられるような状態でないことは、図書館員であればおわかりであろう。勿論、やくざな仕事ではありません。

その図書館の仕事であるが、時代の流れにより、その処理方法が変化しているのはご存じの通りである。それもいわゆる外圧、一つには、情報処理技術の進歩であり、もう一つは、大学が冬の時代に入ってから経費（特に人件費）抑制である。

今までは図書館員が行っていたことが情報機器に置き換わり、収集・保存をしないで提供のみを行う

とか、利用者が図書館を介さず情報を得るとかが日常的な姿として現れている。さらに、対利用者への接点も図書館員の手を離れる状態にある。

今回の図書館分科会は、さらなる将来の図書館の姿を垣間見せてくれる様であった。図書館員にとっては、それを趨勢として受け止め、どう図書館サービスを組み立てていくのか、あるいは我々自身がどう生き残っていくのかを考えることが、差し迫っているであろう。図書館のマネジメントの分野に活路を見いだすか、あるいは図書館サービスの拡大をはかるか、ニッチな部分の手当を行うか。それよりも、もっと積極的に状況を捉え、いわゆる狭い意味での図書館員ではなく異文化、異業種の人員をそろえた「混成チーム」の”図書館員”として、情報の担い手としての役割をはたすのが理にかなっているのではないか。

図書館の使命は、資料を通して、利用者の頭の中に情報を固定することであると考えれば、いかに図書館の様相あるいは状況が変わろうとも根本的な”図書館員”の役割には変化がない。何しろ、情報を作り出す方も生身の人間であることは変わらないので。